02

先生たちのサポートや地域の人たちの応援が私たちの力になります。

福島県いわき市

福島県立磐城農業高等学校

JGAP認証取得

米、トマト、ほうれんそう、日本なし、ミニトマト、肉用牛、採卵鶏・鶏卵

福島県いわき市を代表する農業高校として「自主・勤労・責任」の校是のもと、農業の知識・技術を伝える『磐城農業高校』。2018年、福島県内の高校では初となるJGAP認証を取得し、時代の変化に合わせた新しいニーズに対応できる知識や技術習得を目指した教育を行っている。認証品目は米、トマト、ほうれんそう、日本なし、ミニトマト、肉用牛、採卵鶏・鶏卵。また、「福島イノベーション・コースト構想」の取組として、最先端の農業技術を伝え、地域産業に貢献できる人材育成にも努めている。

※福島イノベーション・コースト構想とは、東日本大震災及び原子力災害によって失われた浜通り地域等の産業を回復するため、当該地域の新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクトです。

2018年3月、穀物（米）のJGAP認証を取得。翌年にはトマトとほうれんそう、さらに2020年には日本なし、牛・鶏と認証品目を追加

創立80年を迎えた『磐城農業高校』。2011年の東日本大震災やその後の余震で大きな被害を受け、一時は同じ市内の勿来高校の校舎を借りたり、仮設校舎での授業を余儀無くされた。ようやく現在の場所に新校舎ができ、学びの場所を戻したのが震災から5年後のことだった。最先端の設備を設置し、2018年にはJGAP認証を取得。元農場長の酒井校長や、現農場長の磯上先生を中心にGAPの考え方を生徒たちに伝えている。「実習における生徒の安全はもちろん、先生方の安全も確保できますし、食品の安全についても生徒一人ひとりに意識づけすることができている」と磯上先生。

草花・野菜について学ぶことができる園芸科に在籍する3年の村上真菜さんは実家は農家ではないが、小さい時から花や野菜に興味があり入学。実習も多く、実際に体験しながら自分の好きな分野の知識を深めることができ、喜びを感じるという。「学校で育てた野菜を家に持って帰ったりするのですが、祖母が〝今まで食べた中で一番美味しい〟と言ってくれたことがあり、とても嬉しかったのを覚えています。GAP認証は自分の知識にもなるし、親などに説明するときも説得力につながります」

2020年に設置されたビニールハウスでのトマト栽培の実習の様子。入室前は靴底の消毒、エアーでのほこり除去など衛生管理も徹底

園芸科で育てているトマトは大玉の「りんか409」、中玉の「フルティカ」、ミニトマトの「フラガール」「イエローアイコ」「オレンジパルチェ」の5種類。市場で人気のミニトマトの他、勉強のため大玉・中玉のトマトも栽培している。トマトの産地としても知られている、いわき市。市内のトマト農家さんが月一で来校し、生育状況を確認しながら直接指導する、という手厚いサポートも行っていたそう。『磐城農業高校』ではトマトは完熟の状態で収穫するため、甘みが強く、濃厚な味わいが楽しめるのが特徴だ。「収穫したトマトは自分たちの手でパッキングして販売しています。すぐ売り切れてしまうこともあって、地域の人にも〝すごく美味しそうだね〟と声を掛けていただいたりすることも多く、自分たちで一から育てたからこそ、そういう温かい言葉や笑顔がすごく嬉しいです」と村山さん。地域のみなさんに見守ってもらいながら活動できている有り難さを感じ「将来は、農業学校の実習助手として野菜の魅力を次の世代に伝える手伝いがしたい」と話してくれた。

①トマトを育てる園芸科・野菜班の先生と生徒のみなさん
②つる下ろし誘引で収穫しやすく管理している
③フルーツのような甘みのある人気品種「イエローアイコ」
④甘みと酸味のバランスが良い「フルティカ」も栽培
⑤収穫してすぐにパック詰めし校内で販売

野菜以外に畜産にも力を入れている『磐城農業高校』。2022年には肉用牛や採卵鶏もJGAPの認証を取得。食品流通科・畜産コースの生徒たちが飼育した牛は、全国の農業高校が枝肉の肉質を競う「和牛甲子園」でも高い評価を得ている。

「僕たちと同じように牛たちにも命があって、牛舎をキレイにすることで快適な生活を送ってもらいたい」と話す2年の星朋樹さん。最初は排泄物の掃除が重労働で上手くできず苦労したそう。「僕たちが一生懸命掃除をすると、牛たちも心地よさそうにしてくれるので、その様子を見るのが嬉しい」と星さん。

体験入学がきっかけで入学を決めたという渡部礼さんは、「卵のパック詰めを体験したのですが、機械でサイズ分けしていたり、卵に上下があることも知っておもしろかったんです」と話す。2人ともGAPは入学して知ったそう。「命の大切さを改めて感じ、衛生管理についてしっかりと学ぶことができました」と渡部さん。

⑥食品流通科・畜産コースの2年生のみなさん
⑦最近では生き物が好きな女子にも人気
⑧牛たちのために力仕事もこなす
⑨牛の健康を保つのに欠かせない牛舎そうじ
⑩ストレスに敏感な鶏には細心の注意を

磐城農業高校の生徒たちのお気に入りたち

磐城農業高校の生徒さんたちが愛する動物や人気のものなどを紹介します。

看板

学校の敷地内に見かける牛の看板は、5年くらい前に卒業した畜産専攻の生徒たちが製作したもの。2種類あり、〝牛が道を通るので気をつけて〟という気持ちを込めて、生徒たち自ら考えてデザイン。朝から夕方まで牛の世話をしながら制作に取り組んだのだそう。同じく敷地内の案内板も同じ生徒たちが制作。

キムラヤのピザパン

地元で愛される老舗のパン屋『キムラヤ』。学校から車で10分くらいの場所に店を構えているが、お昼の時間帯だけ出張販売に来る。1番人気は「ピザパン」。さらに生徒が育てる鶏の卵を丸々1個使った「タマゴパン」や、パンダの顔のカスタードたっぷり「パンダパン」など、種類豊富で選ぶ楽しさもある。販売担当はパン屋店主のお母さん。「磐農の生徒はきちんと整列して順番を待つので、行儀が良くて感心しています」生徒たちと触れ合うのも楽しみなのだそう。

ヤギのひなこ＆はなこ

鶏小屋の裏には、食品流通科・畜産コースの生徒と先生方で世話をしている2頭のヤギ。穏やかな表情で癒される。青い首輪が「ひなこ」、赤い首輪が「はなこ」。隣の小屋で飼っている羊はジンギスカンになってしまうのに対して、ヤギは愛玩動物としての存在。飼い始めて、約3年ほどになる。天気がいい日は外に出して、敷地内の草を食べてもらうこともある。2年生の生徒は、エサを取り分ける作業で世話に参加しているのだそう。

牛舎では黒毛和種の母牛を飼育し、産まれた子牛を育成して市場に出荷。それまでの約10ヶ月間、生徒たちと先生が協力し合い、目標の体重300kgまで育て上げていく。また、食肉用の肥育牛も飼育。鶏舎では現在約900羽の産卵鶏を飼育。生徒たちが育てた野菜や卵は、販売実習も兼ねて生徒たちが運営する「磐農ストア」の他、先生方に直接販売。食肉は農協を通して枝肉を地元スーパーが購入し、その販売会に参加させてもらっている。「売れ残りも少なくて、地域のみなさんが理解して応援してくれているのが伝わってきます」と磯上先生。

『磐城農業高校』では、様々な農業や食に関する問題にも向き合っている。その一つとして、食品ロス削減への取組がある。授業で育てたなしやトマトの規格外を使って作る石けん「BANNOSOAP」。生徒が企画し、デザインも手がけ、企業と協力し生産・販売を行なっている。

校長の酒井先生は「これからも農業や畜産の魅力を伝えていきながら、生徒一人ひとりの夢の実現に尽力したい」と話す。

信頼できる先生たちが生徒を全力でサポート。真剣な表情の中にも時に笑いがあり、仲のいい雰囲気で楽しい授業

うちの学校の名物先生

挑戦することが大事！

福島県いわき市

県立磐城農業高校

校長 酒井正隆先生

地元いわき出身の酒井校長。「父が磐城農業高校出身だったので、幼い頃によく連れてきてもらっていたので馴染みがありました。9代目校長の蛭田先生の影響を受けて、自分も農業を学びたいと思いました」と話す。人を相手にする仕事に興味があり、勉強した農業の知識も活かせる農業高校の先生という道を選んだ。震災当時は農場長として生徒と関わり、その後、福島県内の農業高校の教頭を務め、退職前最後にようやく『磐城農業高校』の校長として地元に戻ってきたのだそう。GAPは「風評被害を払拭したい」という想いで前任の校長たちが取り入れ、酒井校長もその意志を引き継ぎ、根付かせていくために活動している。「実際に農家になる子たちばかりじゃないのですが、GAPのようにきちんとしたルールに基づいて管理していくことは、生徒のためにもなりますし、消費者にも安全・安心なものを届けられることにつながるので、しっかり伝えていきたい」

「校長なのに話しやすい。先生から声をかけてくれることもある」と、やわらかい雰囲気で生徒にも人気。以前は男子が多かったが、農業を学びたいという女子も増え、現在では全校生徒の3分の2が女子という割合だ。昔のような厳しい指導というよりは、言葉遣いや対応に気をつけて、丁寧に説明して理解できるように指導するようにしているそう。

「本校は現在ちょうど80周年なので、この先90周年、100周年と続いていくようにつないでいきたい」と酒井校長。

酒井校長の朝は窓あけから始まる。感染症対策で校長自ら校内を全て窓あけしながら見回ると、早くから登校してくる生徒たちも、ちらほら。「おはよう」「おはようございます」の元気な挨拶が飛び交う

校長室の一角には、部活の優勝トロフィーなどとともに、生徒たちが育てた野菜や果物で作った石鹸や、米「福、笑い」もディスプレイされている

大学時代にバレーボールをやっていた経験から、女子バレーボール部を時々応援に行くそう。「私は怪我しちゃうのでやって見せることはしませんが、時間があるときは練習を見に行って声をかけたりしています」と酒井校長